

中国人の日本語作文コンクール

日本僑報社など主催
／アジア調査会後援

中国に在住する中国人青少年を対象とした「第11回中国人の日本語作文コンクール」（日本僑報社・日中交流研究所主催／アジア調査会など後援）の受賞作をアジア時報3月号に続き、掲載します。今回紹介するのは一等賞3作品です。今回は最優秀賞と一等賞2作品の計3作品を掲載しました。テーマは「日中青年交流について」「なんでそうなるの？」「わたしの先生はすごい」の3つです。日本に留学経験のない学生を対象としたコンクールで、今回は中国全土から過去最多の4749作品の応募作が寄せられ、審査にはアジア調査会も参加しました。受賞作は『なんでそうなるの？』中国の若者は日本のココが理解できない』のタイトルで日本僑報社から出版されています。内容、日本語ともに質の高い作品が多く、中国の学生たちの本音が詰まった作文集は、改めて草の根レベルでの日中関係の重要性について考えさせてくれます。是非、ご一読ください。

（編集部）



一等賞

テーマ…「わたしの先生はすごい」

嶺南師範学院
外国語学院日本語学科 張戈裕

私の曾祖父は日中戦争で亡くなった。多くの中国の家庭と同じように、日本に対する恨みは、家訓の如く血にまじり、肉に入り、骨髓に徹している。私も生まれてから何の疑いもなく、この恨みを受け継いできた。

しかし、運命は不可抗力のものである。大学入試の点数が足りないのです、志望した学部に入れなくて、日本語科に入ることになった。この結果は家族の人々にとって爆弾のようだった。父は浪人になって来年また頑張ろうと言った、母は浪人の苦勞を考慮してくれた。議論の後、とりあえず

入学して、チャンスがあればほかの学部に入らせよということになった。

こんな中途半端な気持ちで、私は大学に入った。日本に對する抵抗があったので、日本語の勉強はうまく行かず、成績が悪かった。日常生活においては、親から授業料を提供してもらったが、生活費は自分でアルバイトして負担しないといけない。毎日、あちこち走り回り、落ち着く暇もなかった。他学部への転入も簡単ではない。心配事が山ほどあって、退学さえ考えた。

ある日、学校付近のカレー屋でバイトをしていた。休日のため、お客さんが多くて、朝から夕方まで働き通しだった。貧血症に寝不足のせい、夕方頃、急に気を失った。折りよく店で食事していた矢野先生に見られた。矢野先生は日本語科の先生だが、授業以外の時間で会話することがなかった。しかし、数日後、矢野先生はいきなり「よかつたら私の中国語の先生になってくれませんか」と家庭教師の話をしてくれた。断るわけにはいかないので、一応引き受けた。しかし先生の中国語のレベルは尋常ではなかった。普通に中国語で会話ができている。先生に中国語を教えるというより、友達のように雑談をするだけのバイトだった。そして先生からもいろいろ教えてもらって、却って私のほうがいろいろ勉強になった。先生のおかげで、私は少しずつ日本という国を理解できるようになった。日本は行った

ことのない世界だが、なぜか心が惹きつけられる場所のような気がしてきた。日本語に対する興味も次第に湧いてきた。

先生がバイトの話をしてくれた心遣いは、心の底から感謝している。先生は東京大学の出身で、教え方もすばらしく、多くの学生に敬愛されていた。しかし、私にとっては、それは一番重要なことではない。先生の好意は、凍り付いた学生の心を溶かす力があつた。先生の存在が光のように、私の暗い道を照らしてくれた。しかし、私はまだ日本が好きだということ認める勇気がない。日本が好きだというのは道徳や家訓に反することだった。特に、私のような家庭では。

ある日、矢野先生の手に湿疹ができたので、私たちは先生と一緒に病院に行った。矢野先生が日本人だと分かる、と担当の優しいお医者さんが一瞬にして冷たい表情に変わった。そのお医者さんは、矢野先生は中国語が分からないと思つたせい、私たちに向かつて思うがままに日本と日本人を批判し始めた。興奮して、かなりきつい言葉も口に出してしまつた。矢野先生にはすべて理解できていた。しかし、ずつと黙っていて何も言わなかった。でも、先生の目に失望と悲しみが映っていた。突然、私は泣きだした。矢野先生は一人で国を離れて、真心をもって中国の学生を教えに来た。確かに過去に戦争があつた。中国の人々が多

くの被害を受けた。しかし矢野先生には何の悪い所もない。戦争があったからすべての日本人が悪いという思考回路がおかしい。矢野先生よりそのお医者さんのほうが恨めしかった。しかし同時に、以前の私もこのお医者さんと同じだったことに気付いた。

冬休みになって実家に帰った。両親から他学部への転入の話をされたので、矢野先生のことを話した。父と母は何も言わなかった。反対の声は二度と出てこなかった。

私の先生はすごい。彼一人の力で私の家の歴史を変えたのだ。日本を憎む歴史を。

(指導教官・李国寧)



一等賞
テーマ…なんでそうなるの？
——中国の若者は日本の
ここが理解できない

江西農業大学南昌商学院 翁曉暉

最近、私とルームメイト、そして日本人先生の三人の間でちょっとした賭けが流行っている。大体は日本語コーナーに来る人数が奇数か偶数かや、ある単語が電子辞書に載っているかないかなどである。私とルームメイトは一

だよ」と言い食べ続けている。私たちも頑張ってみたがどうしてもお腹に入らず、お腹が破裂しては元も子もないと思えば続けるのを諦めた。しかし、先生はまた食べ続ける。「明らかにお腹いっぱいの様子なのに、どうしてやめないの」と思えばかりだった。先生はやつと箸を下ろした。これで私たちは帰れるのかと思ったが、先生は少し休んでは食べと繰り返し、結局二時間半でなんとか完食した。最後、先生は「ご馳走様でした」と言って、席を立った。ルームメイトと私は思わず顔を見合わせて、やっぱり不思議だと感じた。

それから一ヵ月後、久しぶりに日本に留学している先輩と連絡した。彼は日本で体験したことをいろいろ教えてくれた。彼が居酒屋でのアルバイトについて話してくれた時、「日本では残飯が少ないから、お皿を洗うのは本場に楽だよ」と言った。彼は日本に行く前に学校の食堂で机の上の食器の後片付けのアルバイトをしたことがあるのだが、日本と比べると、残飯が多く、汚くて洗いにいと教えてくれた時、ふと食べ放題の鍋料理店で一生懸命食べていた先生の姿が思い浮かんだ。先生はどうしても食べ物を残したくないと必死になって食べた行動は、食べ物を大切にしているからなのではないかと思えてならない。確かに農民たちは苦勞して、私たちに食物を提供してくれている。そし

度も先生に賭けで勝てずに、いつも悔しい思いをしていた。そこで運を天に任せ、一ヵ月後の日曜日の天気について賭けることにした。私たちはその日の天気を雨に、先生は晴れに賭けた。それ以外の天気は無効ということにした。

一ヵ月が経った。幸運の女神は私たちに微笑んでくれたのか、前日の快晴とうってかわって大雨が降った。賭けのご褒美はもともとリンゴ一つだったが、初めて勝ったので先生に無理を言って、食べ放題の鍋料理をご馳走してもらうことにした。どうせ先生がお金を払ってくれるのだから、私たち二人は思い切り食べてやるうと興奮していた。鍋の具材を皿に載せられるだけ載せた。しばらくも経たないうちに私たちのテーブルは野菜や肉を満載したお皿でいっぱいになった。先生は目を丸くしていた。食い意地が張っている私たちは具材を次から次へと鍋へ放り込んでいると、先生は私たちを見ながら手を胸の前で合わせ「いただきます」を敬虔に言った。その様はドラマで見たことがあるだけで、実際にまのあたりにしたのは始めてだった。私たち二人は「へえい変なの」と心の中で不思議に思っただけで掻き込むのに忙しくて、その気持ちはすぐ忘れた。

三十分も過ぎると私たちはお腹がいっぱいになった。でも先生はまだ食べ続けていた。「先生はお腹が空いていたのか。痩せているのに結構食べるね」と私たち二人は先生に分からないよう中国語で話した。先生は「残したら駄目

で、コックは心を込めて料理を作ってくれている。食べ物があつてこそ、私たちの命を維持し生存することが出来るのだ。だから、きちんと残さず食べさせることは食物への敬意を表しているのではないか。そして、食事する前に「いただきます」と言い、完食した後「ご馳走様でした」と言う言葉の意味は私はよく分からないが、この言葉もきつと食べ物への感謝と敬意を表しているものなのだろう。

それから、私たちの食べ物に対する考え方や食事のスタイルが大きく変わったのは言うまでもない。

(指導教官・森本卓也)



一等賞
テーマ…日中青年交流について
——私は折り鶴になりたい
——平和な世界のために

常州大学 陳靜璐

あれは私が小学校の時でした。「なによ。こんなバカな話があつてたまるのですか!」いつもやさしい担任の先生が、顔を真っ赤にして怒鳴ったのです。初めて怒った先生の顔を眺めて、小学生だった私はショックを受けました。先生の言葉で教室の空気は一瞬

にして冷え込みました。

「皆、知っているの？折り鶴は、日本から伝わったものよ。大唐殺を悼むのに、なんでわざわざ日本の折り鶴で悼むのよ！」と先生は言いました。私たちの故郷南京で起きた大唐殺の慰霊祭に、地元の小中学校では手作りの折り鶴を作り、犠牲になった人々に供えることになっていたので。私たちの学校でも、折り鶴をたくさん作りました。用意された紙は数えきれないほどたくさんで、私達は時間を見つけては折り続けました。たくさん先生たちも手伝ってくれました。私たちの担任の先生も手伝おうとしてくれたその時の出来事でした。

あの時、私は、折り鶴が日本から伝わったものだと初めて知りました。担任の先生は理性のない反日派では決してありません。しかし、彼女ですら、このような考え方をしたので。

一枚一枚きれいな紙で丁寧に作った折り鶴に、人々は世界平和への純粋な願望を込めます。でも、折り鶴の起源が日本という理由だけで、この一羽の折鶴は戦争の罪の象徴と考える人もいます。多くの中国人は「第二次世界大戦で、中国国民は日本人によって多大な犠牲を払った。」と強く意識しています。

大学に進学するときもこのことを思い出しました。日本語科を選ぶのに、ためらいの気持ちがあったのも事実です。

ちと心のこもった温かい交流を体験しました。交流した人々からは、純粋な思いやりの気持ちを感じました。やはり、実際の印象は想像したもの以上だったのです。

私達若者は、直接的な交流をもっと経験し、お互いの真の姿を見つめるべきです。私は南京で生まれ育ちましたが、両国の友好を実現できるのは、未来を握っている若者、即ち私たちなのです。歴史を忘れ捨て去るのではなくすべてを受け入れ、交流を通し、お互いの立場や思いを理解することが肝心です。

折り鶴は、作り手から注がれる願いや思いが生命力を与え、翼を開かせ優美な姿を表すのです。小さな羽を精いっぱい広げ、世界の平和の象徴として羽ばたく折鶴のように、私はなりたいたいと思います。今、私は担任の先生に胸をはってこのことを話したいです。きっと必ず先生は理解してくれると信じています。

(指導教官・陳林俊、古田島和美)



しかし、私が生まれて育ってくる間に、私の身近にあった国は、なんと日本なのです。知らず知らずのうちに一番詳しい外国は、日本だと気づいたので。教科書や新聞に載っている日本、Jポップやドラマから知る日本、どれが真実の日本なのかと複雑な気持ちでした。日本のアニメの底辺にある人類愛や平和への思いもわかりました。だからこそ、私は真実を見つめ日本を知りたいと思ったのです。

しかし、年々日に日に中日関係は冷え込んでいきました。2014年9月、日本の民間団体、言論NPOと中国の英字新聞チャイナ・デイリーが行った調査結果が中国でも報道された時、私も級友がっかりしたのです。なんと、日本側が中国に対してマイナスイメージを持っている人の割合が9割以上を占めました。一方、中国側も日本に対してマイナスイメージを持っている人が9割弱だったのです。

私は、お互いの相手の悪い点ばかりを取り上げているばかりの今の状態では友好関係は築くことができない、そう思います。日本に留学している中国人は現在約八万人で日本の全留學生の6割を占めます。また、日本への観光旅行者数は年々増えています。日本に対して好意を持っている中国人がいることを日本人に知ってほしいと強く思います。また、私達も真の日本、日本人を知る必要があるのです。

今学期、私は、日本の大学生や常州に住む日本人女性た

2016年(平成28年)4月13日発行(毎月13日発行) 通巻515号 ISSN 0288-0277

アジア時報

2016.4

The Asian Affairs Research Council

米大統領選特集
2016年米予備選で何が起きているのか
二大政党の分析と展望 西川 賢

アジア調査会講演会
自公連立政権における公明党の役割
山口那津男

講演・討論会
熾烈さを増す米国での日中韓ロビ合戦
ロー・ダニエル

AARC 一般社団法人 アジア調査会 (毎日新聞社内)